

こういったことを意識しながら教育ということはしていないだろうと思っています。当然大きな事件、例えば大阪府の池田小学校で不審者が侵入して1年生が被害に遭った事件だとか、それから先日は加古川の方で2年生の子が自宅で殺害されたという事件、こういった事件があった場合に、学校の方では同じことが繰り返されないように、子供たちに気をつけることを指導したり、それから夏休みだとか冬休み、そういった長期の休みの前に、犯罪に巻き込まれないように気をつけることを注意したりするということが、学校において犯罪にかかわった指導の主流ではないかなあというふうに感じています。これをもって犯罪防止の教育だということを言えば、そうなるかと思えますけども、先生方はそういった**犯罪被害という意識ではなくて、やはり子供たちの生活の指導の一環**ということぐらいで考えていらっしゃるんじゃないかなというふうに感じています。

それからまた、実際に当然、中高生などが暴力だとか恐喝といったような犯罪に遭うこともあるわけですが、そういったときにも、このときにはこういった体制でこんなふうに指導するんだというふうなマニュアルとか、そういったものがあるわけじゃないので、個々の事件だとか、それから個々の子供たちに対して、時には周りの子供たちに知らせずに被害に遭った子だけに先生がしっかりとかわって相手をしていたり、それから時にはその事件の事実をクラスの友達などに知らせて、周りからしっかりと支えて励ましていこうというふうな指導をしている場合があるかなあというふうに思っています。

学校というところは、当然学習面、学力をつけるということも一つの柱ですけれども、**人間としての心をつくったり、それから人間関係づくりということも大きな柱**にしていますので、被害者の支援というのではなくて、やはり困っている人、あるいはつらい思いをしている人がいたら、みんなで助け合おうという気持ちを身につけさせようとしているというのが学校ではないかなと。そういう考え方からすれば、こういった子供たちが大人になって、犯罪に遭って、犯罪の被害者の方に出会ったときに、そういった気持ちを多

く持っていれば、そういったところがかかわってくるのかなあというふうに思っています。

それと、さらに言うと、学校教育では、先ほど言ったように学力をつけるというか、ある事柄を知識として理解させるという部分と、それから道徳のように喜びだとか悲しみだとか、そういったものを感じさせて心を育てるといふ面があります。犯罪被害ということを見ると、やはり小学校や中学校の前半というところでは、この犯罪とか法律とか、マスメディアとか報道とか、そういったことを概念として教えるというのは非常に難しい部分があるので、やはりこういった年代では世の中にはつらい思いをしている人もいるんだとか、そういう人はどんなことを考えているんだろうとか、自分たちが何かできることはないだろうかとか、こういったことをやはり教えていく心をつくっていくということが大事だろうと思います。

それから、中学校、高校、そういった年代になると、やはりそういった概念的なことが十分理解できてくる年齢ですから、やはりそういった年代になって、犯罪、それから法律、被害者の支援、マスコミ等、そういったことについて知識として教えて、そこから導き出されてくる市民、国民としての責任というふうなことを教えることが必要なのかなあというふうに感じています。

学校教育の中でよく使う言葉で、「**発達段階に**応じて」という言葉がよくあるんですけども、やはり犯罪被害ということについても、それぞれの年代で、やはりその子供たちに身につけさせる、あるいは覚えさせるといいますか、理解させる、そういったことを適切に選んで教えていく必要があるのかなあというふうに感じています。

○コーディネーター（川崎政宏）

ありがとうございました。

平賀さんの方から、学校として被害者支援という形では、まだ取組みという形はとられていないというお話ではあったんですけど、個々のいわゆる事件について先生がきちんとかかわりを持たれたりとか、あるいは困ってる

人、つらい思いをしている人に対する、先ほど高橋さんの話にもありましたが、思いやりの心ですかね、そういったところの取組み、かかわり方、指導、そういったことが発達段階に応じてされてるというところは、被害者支援というと、どうしても警察だけの問題としてとらえられがちなんですが、少し広がりがある問題ではないかなということで、受けとめさせていただきました。

今の、それぞれのパネラーの方のお話を踏まえて、警察の被害者支援だけでなく、それ以外にもそれぞれの立場でできる支援があるんじゃないか、あるいは子供たちとのかかわりの中で、今平賀さんがおっしゃったようないろいろなかかわり方、そういったことのお話も出ましたので、少し自由討議のような形で、こういった被害者支援が地域の中で考えられるか、少しお話ができたと思います。

市原さんの方から少しありますか。

○シンポジスト（市原千代子）

私は、あそこにもパネル展示して下さっていますけれども、今現在学校で**命の授業**というか、命の大切さを子供たちに語りに行く時間を持たせていただいています。そこに至った思いというのは、私は息子の事件があった直後から、**子供たちをこれ以上被害者にも加害者にもしたくない**と思いました。そして、**私のようにつらい思いをする親はもう二度と要らない**と思いました。だから、子供たちのところに命の大切さを語りに行きたい、特に私の事件は加害者が少年と成人ということで、子供たちで、その加害者にも未来があると後々少年法なんかの関係でたくさん言われましたけれども、そういうことから、まだ成人となっていない子供がこれから先二度と再犯を起こしてほしくないという思いもありました。更生ということとはまた別になるんですけども、そういう思いもありました。だから、命の大切さを学校に語りに行きたいと思いました。

それと同時に、やっと最近になって、言葉にしてやれるようになったんで

すけれども一番大きく私の中にあったものは、私の娘のことでした。実は、私の子供は3人おり、長男と、それから次男が事件に遭いましたけれども、一番下に娘がおりました。その娘は、ちょうど中学校の卒業式の日に関の事件に遭いました。その後2日後に、兄が亡くなって2日後に県立高校の発表があったんですけれども、不本意ながら落ちていました。そのまま私立校の買い物がお葬式の前の日にあたりして、私はついて行ってやれなくて、妹が行ってくれたんですけれども、そういう状況で、本当にいろんな問題を娘は抱えました。被害者の遺族となるということは、いろんな、私たち以上に子供はつらい思いを抱えます。親がつらい思いで生きている、親がまともな生活ができない状況になっています。そこで娘は生活することを余儀なくされます。そういう状況で、高校に私立の女子校でしたけれども進学をしました。

そうすると、やっぱり周りに知ってる子も少なくなりますし、お兄ちゃんが殺された被害者だということを娘は語れなかったと思います。そういうこともあって、すごい反発する態度とか、いろんな言葉に出し切れない思いを態度であらわしたんだと思います。そうなってくると、周りの友達というか、同級生たちは、変な子とか、変わった子とか、あの子なんかすごい変わった、変な子ねっていう感じで、異端児として扱われるようになりました。最終的には机の上にごみが置かれていたりだとか、いろんないじめにも遭い、お弁当も一人で食べるようになりました。そういう娘を、先生はやっぱり反発、反抗するようなことも多かったものですから、反抗的な態度をとるということで、問題児と先生はみなしました。そういうことで、子供が多くの時間を過ごす家庭でも安心できない、学校でも安心できない、という状況になり娘はそれから安心できる場所を探すのに長い長い時間がかかりました。

先ほど高橋先生も言われましたけれども、**被害に遭うということは選べません**。娘が、例えば中学校の3年生であっても小学生であっても、兄弟が被害に遭うということからは避けられません。**加害者は少年法とかで守られますけれども、被害に遭った子供たちっていうのはどこからも守られません**。

その上に学校でも問題児、異端児とかっていう形でいじめに遭ってる子供はたくさんいると思います。それは犯罪だけではなくて、例えば交通事故で兄弟を亡くされた方の兄弟もそうだと思います。そういうことは年齢を選ばないんです。最近いじめの問題とか、すごくたくさん問題になっていますけれども、そのいじめられる子の中に、**例えばそういう問題を抱えてる子がたくさんいるんじゃないか**っていう思いがあります。娘もそうでしたから。

だから、そういうことをやっぱり子供たちに伝えていかなければいけないんじゃないかというのを思いました。加害者の子供には未来があるってよく少年法なんかで言われるんですけども、被害者の子供にも未来があります。だから、そういうことを子供たちに知ってもらって、いじめで命を落とす子供はいてほしくないと思いますけど、もしかしたら、いじめられている子供の中にはそういう問題を抱えてる子供がいるかもしれないという現実や、現状も少し子供たちに知ってほしいっていう思いもあって、今行かせていただくようになりました。

そういうことも、やはり地域の皆さんにも知っていただけたらなっていう思いがあって、今日はこういうふう言葉にして、しゃべらせていただきます。

○コーディネーター（川崎政宏）

ありがとうございました。

犯罪被害に遭うときに、被害者、被害者遺族という言葉でひとくくりにされてしまいがちなんですけど、**被害に遭った家族の中にいる子供たちにはなかなか最後まで目が向かない部分があるのではないか**というのが、今市原さんが指摘されたところではなかろうかと思います。犯罪、それから交通死、交通事故の死亡遺族の方たちですね、身近なところでそういう子供さんもかなりたくさん接する機会があるのではなかろうかと思います。

あと高橋さんの方で、先ほど田中さん、佐々木さんとかかわりを少しお話いただきましたけれど、皆さんやはり、被害者の方とどう接したらいい

かということで、行政の方たちも一番最初、そこが戸惑われるところじゃないかと思うんですね。そのあたり、今までの体験の中から、どういうふうに行政の方たち、あるいは周囲の方たちはかかわればいいのか、何かヒントになるようなことはありますでしょうか。

○シンポジスト（高橋幸夫）

僕も被害に遭う前は普通の人間で、普通の、皆さんと同じような生活してたんですよ。だから、別に僕は宇宙人でも火星人でも何でもないので、皆さんと同じなんですよ。

でも、家へ帰ってみたら、女房いないでしょう。すぼんと落ちちゃってるんです、谷間にね。谷間に落ちた人間が正常で笑えるはずがないんで、それをもって高橋幸夫は変な人間だなんて、大変怒ったと思うんですが、普通の人間です。

そういうふうな状況の中で、僕はもう一度普通の生活に戻りたい、普通のところへ戻りたい、そういうふうに一生懸命あがいたんですよ。もちろん怒りはあります。でも、もちろんもとに戻りたいというか、あがきがあったんですよ。そこへ、表面的な、怒り狂っているところだけ多分見られてたり、あれは気の毒だとか、被害者はこういうなんだろうなっていう憶測でもって大抵接してこられるんだろうと思うんですけど、田中さんにしても、佐々木さんにしても、最初はまだ「被害者」、そういうな感じで構えが来るんじゃないと思うんですが、仕方ないと僕も思います。

しかし、**被害に遭った人間というのは、とって孤独なんですよ。誰か話したい。本当に話したい。助けて。**これ、普通の人間が助けてって言っているのと同じことなんですよ。それを、佐々木さんはすうっ、すこんと受け入れてくれたんですよ。初対面なんです。初対面なのに、いつの間にやら3時間話して、気がついてみると3時間話していたんです。僕そんなに話していたかもわからないですが、それがすっごく佐々木さんがすっごく、うまいんです。僕も最も話したかったんですよ。次から次から、ずうっと本

当にそうっと水をすくうような形で、僕の気持ちをすくってくれて、そして僕の気持ちをちゃんと形にして、請願という形で政府に訴えるところまで持っていってくださった。僕うれしかったです、僕の頭の中はこんがらがったんですけど、佐々木さんにそれを言って、佐々木さんぐうっと本当に聞いてくださった、**被害者じゃからどうのこうのとか、そういうふうな偏見じゃなくて、本当に普通の人として受け入れてくださったから、僕は話してきたと思うんです。すごくうれしかった。**これが本当のカウンセリングだと僕は思ったんですよ、そのとき。僕精神科で自分でやってきて、僕がやってきたことは今まで何だったんだと思うて、思わず引退だぞって、僕は反省してるぐらいなんです。僕精神科に遭ってて、お礼言ったぐらいです。

本当に人と人という立場に立って、相手の気持ちを受け入れる、そういう気持ちを持ちさえすれば、被害者とのかわり合いは本当にできるんですよ。でも、そこに何か被害者はこうなんだろうな、かわいそうだな、哀れだな、何かしてあげなくっちゃいけないんじゃないかなと、こういう思いが先に立つ。ですから、何か一歩引いちゃうというんですか、何かはれものにさわるような感じ。それは、被害者はすぐびびっと感じるんですね。ああ、僕ははれものなんだ。僕は吹き出ものなんだ。だから、みんな逃げちゃうんです。余計寂しくなっちゃって、孤独になっちゃうんですよ。だから、そうじゃなくて、確かにはれてるかもわかりません、被害に遭ったんだから。でも、そこを普通の人間だっということを理解もし、わかってほしい。わかってくだされば、話ができるんです。話ししてもらえたら、相手にしてくれたら、被害者はとってもうれしい。もうそこで救われるんですよ。孤独なんです。

田中さんにしてもそうだった。田中さんも、最初に被害者だから、高橋さんはどういって傷つけちゃいけない、もう最初から傷ついているんです。傷ついている。

何を言われても、僕ももう何を言われたって構わない、僕ももうすっぽんぽんだから。僕も地で話すから、田中さんも地で来られたから、そこで一

つのペースが同じペースになって、そして田中さんの方と僕の関係できたら、おっ高橋さんも同じ人間じゃがって、最初から普通の人間なのに、田中さんが色をつけてこられたんですね。それは、犯罪被害者って哀れな人、気の毒な人、何かしてあげなきゃいけない人、何かそういうふうなことがあったんですね。だから、やっぱり、僕もこれからこういうふうな形で、グリーンワークという形で、今、自死、自殺でご家族がなくなった方に対して、僕も自分自身が大切な人を亡くして、グリーフの会に行ってるのに、人様のことなどではないんですが、でも僕の体験を何かここに生かすのは何か幸せ。僕だめだな、僕はそれをやらなくっちゃ、僕が体験したんだから、これ以上強いものはないんだから、そう思って僕は今ファミリーズの皆さんと一緒に倉敷でグリーンワークの、その自死のご家族の方と一緒に話をし、自助グループという形で今ちょっとやっています。

そうするとですね、自殺、自死の方のご家族に会って、同じなんですね。自分の大切にしている人が亡くなっちゃって、亡くなったご主人や子供の気持ちをわかってやってなかったんだらうって、自責の念、それから世間の目では、あそこの家の何の何兵衛ちゃんは自殺したんだってというようなことで、色眼鏡でよう話がされないですね。僕がそこへすっと入っていくと、もう僕の話はみんなが知っておられると思うんで、何か話しやすいんでしょうかね、話してくださる、次から次と話をしてくださる。時には涙節、時には笑いもあるんですね。普通の人なんですよ、でも世間の目から見たら、それは普通の方ではなくなっただけですね、その方は。やっぱり人をそこでいつの間にやら色目を見て、事件に遭った人、自死の家族と。何もそんなに色目で見なくても僕は思って、どうとっていくのか、ちょっとそのあたりはまだわかんないんですが、努めてそのあたりを意識しながら声をかけていくと。普通に、ぼんと僕は、ぼんと言うたらどうなるん、ようわからないんですが、そこは佐々木さんや田中さんに聞いたかった、ありがたいなと思ってね。

○コーディネーター（川崎政宏）

ありがとうございます。

佐々木さんの方から、今高橋さんの、どうやってこう、初めて被害者遺族の方に接するとき非常に戸惑われる方が、特に行政の方も非常に多くて、今日も行政の方が大勢参加してくださってるんですが、先ほど二次被害の話も少しいくつか出ていたと思いますけれど、行政の方がこれから取り組んでいく上で、被害者の方たちと接する上で、あるいは取り組みとしてどういった点、何か考えるヒントのようなものがあれば、前半の最後として少しお話しただけければ、と思います。

○シンポジスト（佐々木裕子）

さりげなく行ってお話ししてきたことを今こんなふうに評価していただいて、ちょっとびっくりなんですけれども、確かに犯罪の被害に遭われたということは知っていたんですけれども、まず行って、高橋先生と向かい合って、1対1の高橋先生とお話したという印象しか自分の中にはありません。請願を出されるというところをお手伝いをしなければいけないし、その部分は非常にデリケートだということは思っていたんですけれども、先生はどういう思いでそれを出されるのか、今どんな気持ちなのか、いろいろ話をしていくうちに、身の上話にまでなったりして、なぜ妻と出会ったのかというようなお話までしたのを覚えています。

そうですね、だから確かに犯罪の被害に遭われると、記事になったりすると、特別なことのように感じるんですけれども、例えば家族に何かが起こるということは、私たちにとってもいつ起こるかわからないことであって、それは誰にも起こり得ることだと思っていくと、もしかしたら自分にもそういうことがあるかもしれない、そのときはどういうふうに接したらいいかなってさっき田中さんはおっしゃったんですけれども、多分そういう気持ちでお話しさせていただいたんじゃないかなあと思っています。

それぐらいなんですけれども、特に意図的にどうしようと思っていたわけではなくて、逆に意図的に声をかけようとか思わずに、そういうふうに何か接した方がよかったのかなあと今先生のお話を聞いて思いました。同じ体験